図書館だより

第16号

1987. 10. 15 発行

編集兼発行　三重短期大学附属図書館　514-01　三重県津市一身田中野字藏付157　℡ 0592 32-2342

目　次

二本の足は、二人の医者 …… 刀根 麒一郎 (1)

運動と学問のあいだ …… 茂木 陽一 (3)

新規受入図書案内 …… (6)

全国ベスト・セラーズ …… (12)

二本の足は二人の医者

刀根 麒一郎（教授）

西洋のことわざに「二本の足は二人の医者」というのがある。これは、人間が二本の足を使うことは、二人の医者が健康管理してくれるようなもので、健康のために非常に有益であるという意味である。

ところで、皆さんはこの二本の足を日常生活で、どれくらい使っているのだろうか？いろいろなところで歩行調査が発表されているが、現代の日本人はだいたい5～6千歩というのが平均的な歩数である。3～40年前までは1万歩ぐらい歩いていたので、それから比較すると約半分に減っているわけである。これは皆さんもよく理解していられると思うが、まず自動車の急速な発達・普及、各種交通機関の全国すみずみまで網羅されたこと等により、歩かなくても便利な移行ができるようになったことをあげることができる。さらに、機械化・省力化により人間は筋力を生活の中で使う機会まで少なくなり、ますますからだを使う動作を少なくしたことからも理解できると思う。

その結果、運動不足がからだに及ぼす疾病傷害が、まずアメリカを始めいわゆる先進国でとりあげられた。たとえば、すでに20年前にアメリカのクラウスとラウブ両博士は「運動不足病」という書物を出版し、からだを動かさないことによる弊害について警告し、多くの事例を発表した。中でも有名なのは身体活動の程度と虚血性心疾患との関係についてである。それによると、郵便局の事務員と郵便配達夫、鉄道事務員と鉄道保線手というような、仕事の内容の違いと虚血性心疾患による死亡率を比較し、身体的に不活動な職種の人の方が、約二倍多いと報告している。

さらに、最近出版されたオストランド博士の「健康と体力」という書物の中で、博士は「人間は動くためにつくられたものであって、動かないでいれば、正常な機能は維持できない。いいかえれば、石器時代の生活に適応するように進化した人間のからだが、現代の機械化された

生活に適応しなければならないことは重大な問題を含む」と指摘しているのである。

生理学ではよく廃用性萎縮という言葉を使うが、これは、人間のからだ、特に筋肉や臓器は使わないと萎縮し機能低下をおこすというもので、自動車中心の生活、機械化による筋力を使わなくてもよい労働等により、先進国の人々は、からだに廃用性萎縮をおこしても当然といえるのである。

一般論はさておき、次に私の体育の授業から三重短大生の体力面からみていきたい。本学学生の特徴は、男女共形態面では、身長が平均以上あり、体重は平均以下という細身の学生が多いことである。機能面では、瞬発力・柔軟性にすぐれ、持久力・筋力に劣る。授業では特に持久力の向上を意図した運動種目や方法を実施しているが、最近の5年間は、運動効果がはっきりと出ないことが多い。受験による弊害だけでなく、運動不足により体力がもともとトレーニングされていないため、基礎体力のない学生が多いこともその一因と考えられる。さらに学生の運動するチャンスが少なくなったことも一因と思われる。たとえば、運動クラブに籍をおく学生がめっきり少なくなったことや、通学に車・バイク等を利用する学生がふえたことなどである。本学運動クラブの最大の大会といわれる中部公立短期大学交歓競技会も3年前から全種目（バレーボール・バスケットボール・卓球・バドミントン・硬式テニス・軟式テニス）出場ができなくなった。この大会は中部地区の学生の親睦をはかる貴重な大会である。以前は本学は常に総合優勝をめざし、また数回獲得したほど学生の期待も強かったのである。しかるに今年度は地元開催にもかかわらず優勝種目もなくさみしい結果となった。

しかし、Ⅱ部学生の運動クラブは盛んで、ラグビー・バレーボール・硬式テニス等夜遅くまで練習に励んでいる。また、運動クラブ以外でも休講時に体育館を利用する学生も多い。このことからもⅠ部学生はもっとからだを動かすチャンスを作る必要がある。短大での2年間はアッという間に過ぎてしまうのである。生涯スポーツの立場からも学生時代にスポーツに親しむ習慣や技術を身につけることを私は進めたい。

しかし、運動クラブに入ることは、通学時間等で無理な学生も多数いる。そこで、日常生活の中で運動をとり入れることについて次に考えてみたい。

「運動処方」という言葉を最近よく使うが、運動は正しく実施すれば効果も出るが、誤れば危険なことが多い。つまり薬の処方と同様に一人一人にあった運動の強さ・頻度・実施時間を守ることが運動処方の原則であるが、一般の人が体力測定をし、その分析・処方へともっていくことは実際には無理なことが多い。そこで、最低限歩くことを私は進める。さて、皆さんは一日にいったい何歩歩いているのでしょうか？5千歩以下なら歩行不足、1万歩以上なら合格です。

最近は安くて便利な万歩計や距離計が売り出されているので、それを使うのもいいだろう。しかし、自分の健康のためなら歩数を数えることぐらいの努力が必要です。私の歩数を紹介すると、江戸橋駅から短大まで約1千歩、往復しますから2千歩ということになります。また津駅から歩くと約2千6百歩というように、毎日の歩くパターンは決まっているので、数回数えれば大凡の歩数がわかる。そこで1万歩に達しなければ、さらに生活の中で歩くことを意識的にとり入れなくてはいけない。そのためには、次の二つの方法をとり入れれば確実に歩数を増やすことができる。①2㎞以内は進んで歩くこと、②エレベーター・エスカレーターを使わず、3階までのビルの中では階段を利用することです。パブロフの条件反射を利用すれば2～3ケ月で習慣化できるので、1万歩の生活習慣をまず作ることである。そして、とにかく2ケ月間は頑張ることである。

人間は立体姿勢で歩くことを学習したにもかかわらず、歩かなくても生きていける世の中になって、現代の人々は歩き方や歩く楽しさを忘れてしまった。運動不足から生ずるさまざまな

症状は、歩くことが極端に少なくなった文明生活の産物である。歩くという人間にとって最も基本的な活動をしなくては、からだの諸機能を正常に維持することはできないということを肝に銘じてください。

最後に三重短大のグランド・体育館・テニスコートが学生諸君でいっぱいになり喜々とした若者の躍動する姿を期待して筆を終えたいと思います。

運動と学問のあいだ

好並隆司編『明治初年　解放令反対一揆の研究』を読んで

茂木陽一（講師）

〈はじめに〉

昨年3月27・28の両日、岡山部落解放研究所の主催による「解放令反対一揆シンポジウム」が岡山市で開催された。そこでの報告、議論を若干補訂し、当日報告を行わなかった臼井壽光氏の論稿を収録したものが『明治初年解放令反対一揆の研究』と題して、今年の2月、明石書店より刊行された。

私自身、既に、「明治六年北条県血税一揆の歴史的意義」（『日本史研究』238号）で北条県の事例を、また、昨年10月の全国部落問題研究集会で、福岡県の事例を分析しており（『部落問題研究』91号掲載予定）、明治6年を中心とする「新政反対一揆」研究に関わって幾つかの発言をしてきた関係上、このシンポジウム報告集も興味をもって読んでみた。評価すべき点も含めて、この報告集に対する全体的論評は、別稿において果たすことを予定している。

しかし、そのような研究上の評価と密接に関わりつつも、若干異なるレベルの問題として、この報告集にみられる方法上の問題についていさゝか、この誌面をかりて考えるところを述べてみたい。

〈「解放令反対一揆」規定について〉

このシンポジウムの議論を総括して上杉總氏が「総括と課題提起」を行っている。そこで展開されている氏の所論は、いわば氏の旧説となる「『解放令』反対一揆研究の前進のために」（『部落解放研究』41号）で述べられているものと、幾つかの点で異なっているが、重要な点で一致している。それは、いわば、「運動」（上杉氏らの立脚する「部落解放運動」のことであり、基本的には部落解放同盟によって中心的にすゝめられているものである）の視点を、殆ど媒介なしに、「研究」或いは「学問」に導入することを通じて、「学問」を「運動」に従属させようとする方法に他ならない。

上にいう方法が典型的にあらわれているのが、明治4年以降、とりわけ1873（明治6）年、西日本を中心として生起した諸騒擾（従来、新政反対一揆、徴兵令反対一揆、等々と規定されてきたものだが）を「解放令反対一揆」と規定する、その規定の仕方であろうと思われる。

既に上杉氏は、旧説において、「解放令反対一揆」というタームを使いながら、それを「一揆」としてではなく「部落解放反対騒擾」として捉える指向をみせており、そのこと自体、概念規定の曖昧さを示していると、私は批判しておいたが（前掲報告）、この報告集に集められているシンポ後の座談会の記録の中で、新政反対一揆という捉え方の有効性にかかわって、氏は次のように述べている。

「要するに新政反対一揆というものが、非常にいいイメージでとらえられている。だから解放令反対一揆というふうにあえていわないと、それでくくってしまわないと、そのイメージと対抗できないという心理が働いている。だから、僕は、そういう意味で解放令反対一揆という言葉を多用するわけです……その新政反対というイメージが、もう少し修正されるまでは、解放令反対一揆ということを言い続ける。しかし、理論的には、新政反対一揆の中に問題はとらえられる……」（前掲書P264）。

上杉氏が、いかなる理論によって新政反対一

揆の枠組を設定しているのかは不明であるが、以上の引用からも明らかなように「解放令反対一揆」なる規定は、必ずしも学問的な吟味、検討によって提出されたものではないのである。

そしてまた次のような発言「研究という限りは、たとえば全解連の人達からでもすばらしい証言が得られる…… そのことを寄せ合うと、結果として全解連のような形での運動の進め方はおかしいということが明らかになると思うのです……」（Ｐ１８９）や、「多くの場合肉体的な殺傷までに至っているところでは、今、あまり解放運動をやっていないようです…… そういう場合には運動の観点から説得し続ける……」（Ｐ１９７）、また、「（現在の解放運動にとっての重要問題としてねたみ意識がある、とした上で）、それを下手に刺激すると、再び『解放令』反対一揆のようなことになりかねないという気がします。とはいっても、だから、運動の手を緩めるということではないのです。その点では、もっともっと部落は“増長”すべきだと思います。しかし、その反発をどういうふうに克服していくのか…… そのために、この一揆を研究することは、現在に通じる教訓を引き出す……」（Ｐ２１５）などの発言を重ねて考えれば、「解放令反対一揆」という「表現」が、学問的な吟味からというより、政治的・運動的観点から主張されていることは明らかである。そして、その政治的・運動的観点の内容が、部落と一般民衆との間に対立を設定し、その対立を突破するために、より一層、行政＝権力を部落の側に引き寄せ、その行政の力によって、一般民衆の「差別」性を圧服していこうとするものであるということも、また、明らかであろう。

以上のような観点を、「運動」のレベルで検討する準備はないが、その観点が「研究」の面に導入されることによって、様々な問題が生じてきていると考えられる。

〈史料解釈について〉

第１には、各地の研究者が、多くの史実を発掘していきながら、それらの諸事実・諸史料の位置づけや分析を「解放令反対一揆」という評価にあわせて行なうことによって、多くの限界をつくり出してきているという点を指摘しなければならない。とりわけ、この点は、史料の誤読という問題に典型的にあらわれている。

試みに、本書に収載されている諸論稿の史料解釈を検討すると次のような点を見出すことができる。

好並隆司氏の報告「明治六年美作一揆とその影響」において、好並氏は、後藤靖氏の士族反乱と農民一揆との関連についての「士族叛乱と民衆騒擾」（『岩波講座日本歴史』14，1975年）で展開された見解を論駁するため後藤氏の引用した史料について、後藤氏がそれを誤読していると主張する。今、その問題とされている史料を次に示そう。

壬申四月八日　　新潟県

大蔵省

追て本文 (A)平島村にて発砲の節、賊の隊長と唱へ候者短槍を以て山本少尉に為負傷候に付、益兵隊進撃致奪取候旗、左之通に有之候

徳川家恢復 天照皇 朝敵奸賊征伐

（中略）

右土寇同類の者追々捕縛に及び候内、去る八日白根村に於て当県官員小宮山権少属・(B)神尾権少属並附属の者、賊長等に出会、刀戦に及び、小宮山、神尾両人は傷受候得共、巨魁旧藩人渡辺悌助なる者の右額に深疵為負候得共会… (C)月同日山本少尉に疵為負被打殺候者の死体は同謀之内、加茂新田農元市良左衛門事入江荘平治なる者に有之（後略）〔下線は筆者〕

好並氏は、この史料を根拠に「この旗をもっていたのは隊長一巨魁、旧会藩人、渡辺悌助であって、農民のユートピアを示したものとはいえない」（Ｐ１８）と主張されるのだが、下線を付したところから、(A)→(C)とつづくのは明ら

かで、旗をもっていたのは、加茂新田農元市良左衛門等の一団なのである。好並氏は、明らかな史料の誤読をしている。

また、石瀧豊美氏の報告「『解放令』から筑前竹槍一揆へ」の中で、１８７３（明治６）年の竹槍一揆に際して、放火された「土民住居家」１５３２戸は、すべてが「被差別部落」の被害を示すとされ、その根拠として「なお、明治六年七月、一揆参加者を糾明するにあたり、県は特に次の八か条について、嫌疑者を捜査すると明示したが、第三項で、放火されたのは『官舎並旧穢多村』としており、このことからも、一般村が全く焼かれていないことは明らかである」（Ｐ７４）と述べられている。しかし、引用された史料の該当部分は、「官舎並旧穢多村『等』放火シタルモノ」となっており、明らかに史料の恣意的操作を行っているといわざるを得ない。実際にも遠賀郡に於ては、部落以外の戸長、副戸長等に対する放火が行われていることが確認できるから、石瀧氏の上述の史料操作は極めて意図的なものと考えざるを得ない。

他にも、三好氏の報告の８１～８２頁、臼井氏報告の１６０～１６１頁の史料解釈も誤っている。

以上の点からも明らかなように、各報告者は、自分の対象としている一揆や事件が「解放令反対一揆」であるということをア・プリオリに前提しているために、依拠する史料を勝手に解釈したり、操作を加えたり、誤読をしたりして、本来その史料が示している以外のことを主張することになっているといえる。このことは、彼らの史料読解力が稚拙であるということではなく、評価を先行させてから、史料解釈を行うという誤った研究方法から生じたものであるといえる。

〈明治維新評価について〉

様々な問題点の第２は、先行研究に対する検討・評価のあり方の問題である。

上述の「解放令反対一揆」の規定、たゞそれだけを根拠として、好並氏は〈政府・部落〉対〈農民・士族〉という図式を作り出し、明治政府の先進性・解明性を抽出し、そのことから進んで、明治維新＝ブルジョワ革命という規定をふりまわしている。或いは、石瀧氏のように「歴史段階としてみると、ついていけない方が哀れなんですね。細々とした可能性にあくまでもしがみついている。日本全国の人がほとんどそれであって、ごく一握りの人だけが確信を持って、あと何年後にはこうなるという見通しをもちながらやっているわけですね……」」（前掲書Ｐ２７７）という発言が出てくる。彼らは、これまでの明治維新研究、明治政府の権力構造分析等々に関する蓄積をどれほど検討して、このような見解を得たというのだろうか。彼らの報告を検討する限りでは、そのような努力はうかゞえない。こういった明治維新論や、手放しの維新官僚に対する肯定的評価は、たゞ「解放令反対一揆」規定から出発しているのである。該一揆において、〈部落と民衆が対立している→民衆は封建的で遅れている→民衆は明治政府に反抗している→したがって明治政府は開明的で進歩的である〉、このような筋道の上で、明治維新研究における研究史上の周知の対立、絶対主義規定とブルジョワ革命規定の対立の図式の中で自らの主張をかざるために、後者を採用してみせる、というものにすぎない。そこには、ブルジョワ革命規定にせよ絶対主義規定にせよ、研究史上の位置づけを与えるために必要な、権力構造・政治過程・階級的基礎・経済的発展段階等々に対する顧慮はまったく見られないといえるのではないか。

このような先行研究に対する評価のあり方もまた、〈運動→評価→事実の発掘→評価にあわせた解釈〉という研究スタイルがもたらしたものだといえよう。

〈おわりに〉

以上の如く、このシンポジウムの報告集は、学問研究が、それ固有の方法をもたずに、現実の運動に従属した時に生ずる諸々の問題点を具体的に示したものといえよう。たゞ注意しておきたいのは、現実の運動や社会状況を研究者がうけとめて自己の問題意識としていくというこ

とと、運動のもつ現実評価をそのまゝ歴史的過去に投影することとは、全く別のものだ、ということである。前者は全ての研究において不可欠のものだが、更に研究方法の固有性という媒介項をいれることにより、始めて研究と運動の相互の自立と生産的な相互関係が可能になるのである。

しかしながら、また、この報告集は、当該期の一揆に関する多くの新事実・新資料を我々にもたらしてくれた。また、多くの注目すべき論点も示された。それらについては、先述したように別の機会に検討したいが、この報告集はしたがって、明治初年一揆研究に多くの寄与をなしていることは疑いをいれない。そして、そのような意味で有意義な研究が、にもかかわらず、運動の論理に従属していること、そして、おそらくは、運動の論理が先行することによって、諸事実・新資料の発掘がなされたのであろうこと、そういったことを併せ考える時、固有の論理にもとづく研究が、この日本社会の中では極めて弱い現実の力しかもちあわせないことに、何ともいえないもどかしさを感じてしまう。

新規受入図書案内

総　記（000）

オックスフォード　レファレンス事典

朝日新聞縮刷版　6月号～8月号　朝日新聞社
国立国会図書館所蔵　主題別図書目録
日外アソシェーツ
The New Encyclop
Robert P.Gwinn　他
時事年鑑　昭和62年版　時事通信社
朝日年鑑　1987　朝日新聞社
中国年鑑　86年版　中国研究所　編
百科年鑑　1986　下中　邦彦　編
日本都市年鑑　1986　全国市長会　編
林　達夫著作集　別巻1　書簡　林　達夫
日本の白書　昭和62年版
日本情報教育研究会
出版年鑑　1987　出版年鑑編集部
誌名変遷マップ和文編　学術情報センター　編
アメリカン・マガジンの世紀　常盤　新平
世界年鑑　1987　共同通信社
岩波文庫総目録　岩波文庫編集部
新収洋書総合目録　パート1～3
国立国会図書館編
誌名変遷マップ　根岸　正光　編
三重県政要覧　三重県

〔岩波新書〕
エスキモー極北の文化史　宮岡　伯人
敬語　南　不二男
折々のうた　大岡　信
平和憲法　杉原　泰雄
象徴天皇　高橋　紘
ガン遺伝子を追う　高野　利也
日本語の構造　中島　文雄
集落への旅　原　広司
馬は語る　沢崎　担
酒と健康　高須　俊明
イスラム急進派　岡倉　徹志
マリリンモンロー　亀井　俊介

〔岩波ブックレッド〕
“狂言”地価への提言　早川　和男
火山噴火予知と防災　伊藤　和明
国家は万能か　小中　陽太郎
売上税　北野　弘久
憲法はどう生きてきたか　渡辺　治
精神科医の訴え　吉岡　真二
創造性を育てる　永井　道雄　他
ふぞろいの林檎たちへ　山田　太一
“無敵”なOLになる方法　岩波書店編集部
クマに会ったらどうするか　玉手　英夫
ルソン戦―死の谷　阿利　莫二
「エイズ」の知的対処法　行夫　良雄
新聞記者の仕事とは　岩波書店編集部
恐怖のアウシュヴィッツ　永井　清彦　編
平和を学ぶゼミナール　太田　堯　他
日本の米　福田　修

〔有斐閣新書〕
ファミリー．カウンセリング　岡堂　哲雄

新書　わたくしたちの憲法　宮沢　俊義　他
神話学とは何か　吉田　敦彦　他
インテリジェント・ビルとは何か
小寺　利夫
ワープロ時代の文章作法　能戸　清司

哲学・宗教（１００）

「共同幻想論」ノート　松岡　俊吉
心理学への招待　北尾　倫彦　他
現代フランス思想への誘い　市倉　宏祐
体系と歴史　マンクレート・リーデル
アンチ・オイディプス　ジル・ドゥルーズ
間主体制の倫理　谷口　龍男
情念の哲学　宮地　たか
チェルヌイシェーフスキー著作選集　Ⅰ．Ⅱ
チェルヌイシェーフスキー
内面形成の思想史　寺田　光雄
昭和思想史６０年　鷲田　小弥太
カントの人間論　J．ジュヴァルトレンダー
東洋倫理思想史　木村　俊彦
トリーアの社会史　的場　昭弘
異化　エルンスト・ブロッホ
現代フランス哲学１２講　J．デリタ　他
性の歴史　Ⅰ　Ⅱ　ミシェル・フーコー
ヘーゲルにおける自由と共同　柴田　隆行
ヘーゲルかスピノザか　ピエール・マシュレ
パース著作集　チャールス　サンダースパース
コミュニケーション　ミッシェル　セール
ヘーゲル・左派論叢　第４巻
ブルーノ・バウァー　他
「全知識学の基礎」の研究　フィヒテ
定言命法　H．J。ペイント
存在の忘却　安藤　孝行
生活世界と歴史　H・ナール
シンボルの誕生　山下　主一郎
人間　アルノルト・ゲーレン
Memory and Awareness
Raberta．L．Klatzky
ハイデッカー全集　第５１巻　第３２巻
ハイデッカー
心理学要論　磯貝　芳郎　編

歴　史（２００）

歴史哲学の本質と目的　R．G．コリングウッド
精選　中国地名辞典　塩　英哲　編訳
日本姓氏大辞典　丹羽　基二　他
中日対照　世界地名人名辞典　竹内　安己
ロシア史の新しい世界　和田　春樹　編
ビルマの歴史と現状　張　正蕃
概説　ドイツ史　望田　幸男　他
アメリカンハンドブック　佐伯　彰一　他
古典大系　日本の指導理念　１～２０
石井　良助　他
世界各国便覧叢書　（イタリア共和国）
在イタリア日本国大使館　他
菰野町史　上巻　菰野町教育委員会
三重県史　資料編　近代１　三重県
ジャンヌ・ダルグ処刑裁判　高山　一彦　編

人物叢書

聖徳　太子	北条　政子	親　鸞	
淀　君	福沢　諭吉	徳川　吉宗	
石川　啄木	持統　天皇	佐倉　惣五郎	
西郷　隆盛	柴　武部	伊達　政宗	
南方　熊楠	日　蓮	井伊　直弼	
樋口　一葉	紀　貫之	井原　西鶴	
富岡　鉄斎	武田　信玄	橋本　左内	
乃木　希典	日本　武尊	平賀　源内	
大隈　重信	明智　光秀	小林　一茶	
河上　肇	和気　清麻呂	松尾　芭蕉	
江藤　新平	北条　義時	国　姓　爺	
清沢　満之	光明　皇后	由比　正雪	
藤原　恒窟	江川　担庵	渡辺　華山	
行　基	桓武　天皇	伴　善男	
清少納言	和泉　式部	源　義経	
後白河上皇	千葉　常胤	畠山　重忠	
栄　西	覚　如	蓮　如	
三条西　実盛	朝倉　義景	千　利休	
島井　宗室	天草　時貞	池田　光政	
山鹿　素行	市川　団十郎	前田　綱紀	
賀茂　真淵	杉田　玄白	大田　南畝	
平田　篤胤	間宮　林蔵	調所　広郷	
黒住　宗忠	広瀬　淡窓	佐久間　象山	
山内　容堂	和　宮	ハ　リ　ス	
森　有礼	勝　海舟	正岡　子規	
滝　兼太郎	ヘ　ボ　ン	幸徳　秋水	
岡倉　天心	加藤　弘之	前田　正名	
山県　有明	豊田　佐吉	武藤　山治	
山室　軍平	尾崎　行雄		

蘇我蝦夷・入鹿　ジョセフ＝ヒコ

藤原　仲麻呂　　鴻池　善右衛門
大黒屋　光太夫　　河竹　黙阿弥

社会科学（300）

家事労働と資本主義　B．ドゥーデン
日本の財政・金融問題　深尾　光洋　編
日本アルマナック　教育社
江戸風俗資料　宮尾　しげを　他
内蒙古経済発展史札記　沈　斌華
現代　中国経済史研究　草野　文男
不当労働行為事件命令集　６８～７５
中央労働委員会事務局　編
教育実践基礎講座　１．２
日本民間教育研究団体連絡会　編
ポリテフニズムと教育　クルプスカヤ
たのしくわかる中学家庭科の授業
家庭科教育研究者連盟　編
教師の話し方　１　２　３　白井　勇　他
社会現像としての疎外　アダム・シャフ
国民経済計算年報　経済企画庁
国際金融と開放マクロ経済　河合　正弘
日本の財政赤字構造　井堀　利宏
財政構造とマクロ経済分析
マーティン・フェルドスタイン
経済計算の理論　松田　和久
経済動学の理論　宇沢　弘文
ハイエク全集　７，８
ポケット注釈全書　小野　清一郎　他
判例リース・クレジット取引法
吉原　省三　他
リース取引講座　加藤　一郎　他
社会福祉の現代的展開　日本社会事業大学　編
財政統計　昭和６１年度　大蔵省主計局調査課
マンションの法律　玉田　弘毅
総力戦体制と教育　戦時下教育研究会
国際環境の変容と日米関係　細谷　千博　他
男女共修の家庭一般　佐藤　美枝子
日本金融史点描　戸田　正志　他
部落問題事典　部落開放研究所　編
Labor and employment low　F．A．ハイエク
Peter M．Panken
ビジネスマンの父より息子への３０通の手紙
キングスレイ・ウォード
法律関係雑誌記事索引　第１８号
法務図書館　編
国民自治年鑑　'８６
国民自治年鑑編集委員会

刑事訴訟法の基礎理念　鴨　良弼
新しい教育技術　１～７　城丸　章夫　他編
環境アセスメント・埋蔵文化財と法
日本土地法学会
現代フランスの国家と政治　中木　康夫　編
「非労働時間」の生活史　川北　稔　編
子どもの見える教育　大槻　健
思春期と非行問題　川上　満
教育入門　五十嵐　顕
学校に背を向ける子ども　河合　洋
中学生いじめ自殺事件　村山　士郎　他
希望をまなぶ学校　伊達崎　義信　他
わかる授業　三上　満
能力発達と学習　勝田　守一
国際労働基準とわが国の社会法
秋田　成就　編
刑事訴訟法教材　平野　一　他
オンブズマンの制度と機能
フランク・フティシイ
社会政策学会年報　第３１集　西岡　幸泰　編
戦後日本の争議と人間　河西　宏祐　編
離婚と互責　村井　衡平
金利・外国為替と国際収支　馬渕　透
入門　子ども心理学　１～４　佐藤　隆二
手をつなぐ中学生の本　１～２０
菊地　良輔　他
非行をとらえ直す　竹内　常一　編
図でみる中小企業白書　昭和６２年版
中小企業庁
環境白書　昭和６２年版　環境庁
地方財政白書　昭和６２年版　自治庁
日本国勢図会　１９８７　矢野　一郎　鑑修
価格と投資　R．ション
公共需要と私的欲求　E．S．フェルプス
史的唯物論と経済学　上．下　林　直道
経済要覧　昭和６２年版　経済企画庁
公務員の社会保障　坂本　重雄
どの子も燃える授業の創造　坂本　重雄
教育の方法　赤木　昭夫　他
学級学年づくりのポイント　松本　幸夫
現代家庭の法律読本　１～４　渡辺　洋三
環境教育のすすめ　沼田　真　監修
家庭のくずれと子どもの自立
日本作文の会　編
いじめをこえて仲間づくり　日本作文の会　編
感情の教育　近藤　薫樹
教師のための話材　学校例話研究会
子どもの人格と学力　１　４　川合　章　編
家族と国家　利谷　信義

雲よ歌え愛とロマン　益田　俊彦
自立への旅立ち　中村　博
友情の円陣　森　薫
子育て　子別れ　丸木　政臣
転換する日本企業　中谷　巌
変わる中部の企業　日刊工業新聞名古屋支社
未来適応企業　A．トフラー
トヨタの現場管理　日本能率協会　編
衰亡と繁栄　牧野　昇
イノベーションと企業家精神
P．F．ドラッカー
アイアコッカ　リー．アイアコッカ
今日の労働時間問題　藤本　武
Employee dismissal law and practice
Henry H．Perritt．Jr
サービス産業転換の時代
技術革新と雇用　経済企画庁
ザ．総合商社　柴垣　和夫　他
大前研一の日本企業生き残り戦略　大前　研一
日・米・韓企業の経営戦略　野村総合研究所
経済動学の理論　宇沢　弘文
経営学原理　降旗　武彦
安田財閥　由井　常彦
経営者の役割　飯野　春樹
新　経営英和辞典　野田　信夫　編
ベンチャーキャピタル　&　ベンチャービジネス　東洋経済　編
プロト工業化の時代　斉藤　修
現代経営事典　小林　規威　他
経済政策と第三次産業　飯盛　信男
現代日本の公益企業　岡島　久雄　編
現代アメリカ労働史論　小林　英久
会計情報システム選択論　岡部　孝好
法治国理念と官僚制　宮崎　良夫
裁判官　日本弁護士連合会　編
現代司法の構造と思想　小田中　総樹
続　現代司法の構造と思想　小田中　総樹
日本の魅力　ドナルド．キーン
誰れでも知りたい世界の日本人観　筑紫　哲也
ジャパノロジストの眼　中村　哲郎
新社会福祉理論　加茂　陽
金融の自由化と金融政策　鈴木　淑夫
裁判官論　〔増補三版〕　斉藤　秀夫
情報公開　石村　善治　編
学校問題に関する１０年間の雑誌文献目録
日外アソシエーツ　編
教育学・教育心理に関する１０年間の雑誌文献目録　日外アソシエーツ　編
学校教育・学校運営・教職員に関する１０年間の雑誌文献目録　日外アソシエーツ　編
'８７　民　力　朝日新聞社
社会保障年鑑　１９８７　健康保険組合連合会
家計調査年報　昭和６１年　総務庁統計局
くらしの統計　'８７　国民生活センター
第三十六回　日本統計年鑑　昭和６１年
総務庁統計局
中小企業白書　昭和６２年版　中小企業庁
労働白書　昭和６２年版　労働省
女性の職業のすべて　女性職業研究会
中学校の公民　大野　一夫　他
中学校の地理教育　半田　正夫　編
講座　憲法訴訟　第１巻～第３巻　芦部　信喜
現代経済学辞典　小泉　明　他編
新版　憲法　１～４　阿部　照哉　他編
実習　憲法　阿部　照哉
実習　憲法　阿部　信喜　他
憲法学の開拓線　寺島　孝
憲法の焦点　Part １～３　阿部　信喜
社会開発政策　加藤　寛
経営体の成長と構造変化　岩田　龍子
外からみた日本　毎日新聞社外報部　編
日本ほど重要な国はない
マイク．マンスフィールド
ジャパニーズ　スクール
ベンジャミン．C．デューク
国際通貨体制の軌跡　ミルトン．ギルバート
米国連邦準備制度　B．H．ベックハート
日本兵食史　上．下　陸軍糧秣本廠　編
現代社会学辞典　北川　隆生　監
憲法　山下　健次　編
〃　体系と争点　榎原　猛
日本の軍備・円・政治
ジョン．K．エマーソン
日本人　E．O．ライシャワー
憲法訴訟の現代的展開　芦部　信喜
憲法保障の理論　川添　利幸
憲法第９条　改訂版　有斐閣　編
新版　憲法２５講　清水　睦　他
現代人権論　芦部　信喜
明治憲法成立史　上．下　稲田　正次
注釈　日本国憲法　上　樋口　陽一　他
戦争放棄と平和的生存権　深瀬　忠一
現代憲法講座　上．下　横田　耕一　他
シェースの憲法思想　浦田　一郎
ドイツ立憲主義と議院の自律権　西田　光義
新版　憲法体系　和田　英夫
憲法の精神　浦田　賢治　編
概説　憲法　山下　健次

入門法学全集　1．2　長谷川　正安
在日韓国・朝鮮人と人権　大沼　保昭　他
憲法問題を考える　佐藤　功
続　憲法問題を考える　佐藤　功
生存権論　大須賀　明
権威的秩序と国家　藤田　勇
憲法３０講　中村　睦男
現代憲法理論の源流　高橋　和之
判例　憲法入門　畑　博行
アメリカにおける司法積極主義と消極主義　水谷　実
日本国憲法判定の過程　Ⅰ．Ⅱ　高柳　賢三　他
立憲主義の研究　（増訂版）　中川　剛
治安維持法裁判と弁護士　森　正
西ドイツの憲法裁判　田上　穣治
日本人の憲法感覚　奥平　康弘
新版憲法判例　阿部　照哉　他
基本憲法　宮田　豊　他
選挙制度改革の理論　吉田　善明
解説　憲法基本判例　尾吹　善人
新版　憲法演習　2　清宮　四郎　他
公用収用法原理　美濃部　達吉
日本国憲法　橋本　公亘
憲法の現代的課題　宮沢俊義先生古稀記念会
憲法乃憲法史研究（全）　美濃部　達吉
公法の解釈　橋本　公亘
日本国憲法の条件　小林　昭三
現代憲法論　カール．レーヴェンシュタイン
比較憲法　樋口　陽一
憲法学講話　小嶋　和司
現代の憲法問題と改正論　竹花　光範
違憲審査　横田　喜三郎
法の支配と行政法　杉村　敏正
日本国憲法の理論　佐藤　功先生古稀記念会
憲法と裁判　宮沢　俊義
行政裁判制度　南　博方
Japan's Economy　Daniel．I．Okimoto
Basic Community cases　Berndrd Rudden
行政訴訟の法理　田中　二郎
行政の法理　雄川　一郎
明治前期の憲法構想〔増改訂版〕　家永　三郎　他
日本人の食生活史　下田　吉人
万葉集の服飾文化　上．下　小川　安朗
ユートピアと食生活　田村　真八郎
共学家庭科の理論　村田　泰彦　他
消費者教育　日本消費者教育学会　編
家庭科の授業研究　菊地　るみ子　他
家庭科の授業設計　井上　照子
消費者教育指導の実際　藤枝　恵子　他

自然科学（400）

調査統計入門　船津　好明
数理統計学　星野　義夫
新　エスカシリーズ　全２１巻　木村　修一　他
医事法学叢書　１～５　日本医事法学会　編
小児保健　荒井　冨　他
食糧白書　昭和６１年版　農業研究センター　編
中小企業白書　昭和６１年版　中小企業庁　編
理科年表　昭和６２年机上版　東京天文台　編
からだの歳時記　石川　恭三
宇宙論と統一論の展開　佐藤　文隆　編
病理学　標準看護学講座６　吉田　時子　他
病理学　現代看護学基礎講座６　林　豊　編
病理学　最新看護学全書６　石河　利隆　他
新編　食事療法シリーズ　全１３巻　宮川　哲子　他
宇宙・天文大辞典　小田　稔　監修
日本人体解剖学　第１巻　第２巻　第３巻　金子　丑之助
病理学総論　各論　赤崎　兼義　編
標準組織学　総論　各論　藤田　尚男　他
病理学　第４版　今井　環　監修
腎臓　H．E．Dewardener
管理栄養士国家試験受験講座　管理栄養士国家試験教科研究会
主要疾患の病態生理　中野　昭一　編
改訂版　肝臓病の病気　織田　敏次　他編
臨床栄養　三浦　裕士
生体膜と生体エネルギー　香川　靖雄
食生活論　足立　己幸　他
脳と神経の生物学　伊藤　薫
エイズとガンの免疫学　近藤　元治
発酵食品　中野　政弘
非金属の化学　W．L．Jolly
化学実験法　畑　一夫　他
給食施設と栄養管理の実際　西岡　葉子　他
人体を測る　小原　二郎　他
生物化学実験法　１～１６　福井　作蔵　他
ヒトの日周リズム　伊藤　真次
光と植物　柴田　和雄
食品と解毒の化学　小柳　達男
生体の調節機構　石橋　貫昭　他

栄養学　２０章　吉川　春寿
健康教育・栄養教育　宮坂　忠夫　編
食欲の科学　河村　洋二郎　他
タンパク質と酵素　大井　龍夫
米・大豆と魚　日本栄養・食糧学会　編
免疫と生体防御　山村　雄一　他

工学及び家政学（５００）

現代技術と世界　日本科学者会議　編
きもの知恵袋　山下　悦子
家庭の医学　柳下　徳雄
食のエッセイ珠玉の８０選　コア編集部
原子力その不安と希望　岸本　薫　編
環境エネルギー年鑑　１９８５
公害問題研究会
Ergonomics of the home　E. Grandjean
上手に縫える着物の仕立て方　野村　辰雄
東海三県の長期工業統計　吉村　三郎　他
新しい和裁　織田　稔子
さわやか暮らしの知恵ノート　吉沢　久子　編
現代世界鉄鋼業論　戸田　弘元
国際化のなかの自動車産業　橋本　輝彦
技術革新と研究開発の経済分析　若杉　隆平

産　　業（６００）

地域産業政策　成瀬　忠男
新・地域産業づくり　川崎　充
航空賠償責任法論　藤田　勝利
現代航空法　坂本　昭雄
大阪産業史　武部　善人
地域パーフォーマンスの研究
宮永　昌男　編
図説　農業白書　昭和６１年度
農林統計協会
再建へ　出発進行！　練早　忠義　編
アメリカの産業構造〔第６版〕
ウオルター・アダムス　編
日本の産業読本　日本興業銀行
変貌する日本産業　山本　修滋　編
新産業シリーズ　１～１８　竹内　宏　他
革新的消費者行動　T. S. ロバートソン
８０年代の流通産業ビジョン
通商産業省産業政策局
消費者と企業の共存　横田　澄司
２１世紀産業社会の基本構想
通商産業省産業政策局　編
現代ヨーロッパ産業論　出水　宏一
産業組織政策原理　小西　唯雄
わが国の農政　農政問題総合研究会
通商白書　昭和６２年版　通商産業省

芸　　術（７００）

くずし字用例辞典　児玉　幸多　編
日本の美術　文化庁
庶民の染織　岡村　右エ門
黒い聖母　柳　宗玄
講座　日本の映画　２　３　５
今村　昌平　他編
体力診断システム　宮下　充正
健康の科学　九州大学保健科学センター
高令者とスポーツ　宮下　充正　他
健康増進　苫米地　孝之助
運動と栄養　山岡　誠一　他
体育科学　第１３巻　第１４巻
体育科学センター　編
楷行書総覧　日本放送出版協会
ケネス・クラーク絵画の見かた
ケネス・クラーク

語　　学（800）

増補　言語その解体と創造　竹内　芳郎
ことばの理論
　ロワイヨーモン人間科学研究センター　編
ブラッシュアップ英会話　小川　邦彦
ライトハウス英和辞典　竹林　滋　他
言語行為　J．R．サール
ことばの本性　築島　謙三
現代　独和辞典　ロベルト．シンチンゲル
国語大辞典　言泉　林　大　監修
アメリカ英語を読む辞典　最新　フミ
日米国語表現辞典　市橋　敬三
国際英語　P．トラッドキル　他
最所　中国情報辞典　新堂　明保　他
英語で日本語を話そう　小松　達也
独和広辞典　ロベルト．シンチンゲル
日米ビジネスコミュニケーション
　西山　和夫　他
意味論と語用論の現在
　ジェフリー．N．リーチ
実用ビジネス英語　重長　信雄

文　　学（900）

モンゴルの砂塵　長山　義弘
幸福という名の不幸　曽野　綾子
妻たちの2．26事件　沢地　久枝
彷徨の祝祭　白井　健三郎古稀記念会
ポプラの樹のある風景　小川　正子
冷い夏　熱い夏　吉村　昭
暗い血の旋律　松本　清張
芥川龍之介小説集　一　二　芥川　之介
絆　小杉　健治
荷風全集　第一巻～第二十九巻　永井　壮吉

全国ベスト　セラーズ調査

8月31日調

1位　サラダ記念日　俵　万智　著
2位　塀の中の懲りない面々
　安部　譲二　著
3位　別れぬ理由　渡辺　淳一　著
4位　ビジネスマンの父より息子への30通の手紙　K．ウォード　著
5位　国を思うて何が悪い
　阿川　弘之　著
6位　さらば極道　安部　譲二　著
7位　特急「おおぞら」殺人事件
　西村　京太郎　著
8位　伊勢・志摩に消えた女
　西村　京太郎　著
9位　塀の外の男と女たち
　安部　譲二　著
10位　ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー　山田　詠美　著

（出版ニュース　9月21日号より）